

修士論文(要旨)

2013 年 1 月

日本語の所有表現の研究

指導 新屋映子 教授

言語教育研究科

日本語専攻

211J3003

何意凡

目次

1. 研究目的	1
2. 研究方法	1
3. 結論	1
4. 日本語教育への提言	1
5. 今後の課題	1

参考文献

要旨

1. 研究目的

日本語の所有表現には「X (に)はYがアル」と「XがYをモツ(モッテイル)」の両形式がある。英語の「X HAVE Y」、中国語の「X有Y」、に対し日本語の所有表現には上記の両形式があるため、中国語母語話者の学習者にとって、その使い分けは非常に困難である。

日本語の教科書では、初級の場合、「X (に)はYがアル」のみを教えるのが主流である。学習者がこの表現形式を繰り返し学習することにより、文型として身につけてしまった結果、「X (に)はYがアル」形式を使うには相応しくない場合にも使ってしまうことがある。日本語の所有表現「XはYがアル」、「XにはYがアル」、「XがYを持ツ」はどのように使い分けられているか、研究することにした。

所有表現の中でも、ヒト名詞を所有者とし、具体物を所有物とする場合を対象とした。

2. 研究方法

- ①日本語の小説を資料に用いる。『新潮文庫の100冊CD-ROM版』および青空文庫に収録されている34編の小説からの例文を集め、データとする。
- ②日本語母語話者115名を対象としたアンケートにより3種の所有表現の形式「XはYがアル」、「XにはYがアル」、「XがYを持ツ」に感じる自然度について調査する。
- ③集めた例文とアンケート調査の結果を分析し、日本語の所有表現に関する先行研究の当否を検証し、3種の所有表現の用法を明らかにする。
- ④現在日本語教育の現場で使われている教科書における所有表現の問題点について論ずる。

3. 結論

- ① 所有物がヒト名詞の場合、「所有者(ニ)ハ所有物ガアル」、「所有者(ニ)ハ所有物ガイル」の両形式が可能である。ただし、「いる」を用いた場合は存在意識の強い表現となり、「ある」を用いた場合は所有・所持意識の強い表現となる。
- ② アル所有文の所有物は「人間関係」類および「資本・金銭・財産類」が多い。一方、持ツ所有文は「物品」類および「資本・金銭・財産類」が多い。
- ③ 持ツ所有文は限定性の高い修飾句を伴うことにより所有物の特立性を高められ、自然さが増す場合がある。
- ④ 所有文が連体修飾句として用いられる場合、「一ガ」を避け、「一ヲ持ツ」を使用することが多い。特に、子、夫、妻を所有物とする持ツ所有文は、所有者を表す名詞に対する連体修飾の形で使用されることが多い。

4. 日本語教育への提言

本研究の結果を踏まえ、日本語教育における所有表現の指導方法に関し、以下のことを提言する。初級の段階では、アル所有文の所有物は「人間関係」類および「資本・金銭・財産類」を中心に導入し、中級段階で、所有物に「物品」類を加える。その際、修飾句を伴った形で導入する。また、持ツ所有文の場合、所有物を「物品」類および「資本・金銭・財産類」に限定することにより、学習者の使用における混乱が回避できるのではないかと思われる。

5. 今後の課題

今後、アンケート調査、コーパス調査ともに十分な量のデータを集め、調査の幅を広げ

るとともに、研究の質を高めることを心掛けたい。

参考文献

阿部博幸(1990)「場所的存在の表現をめぐる——日・英・中の比較による‘場所的存在’
と‘所有’‘所在’との関係——」『日本語と日本文学』13.

池上嘉彦(1982)「表現構造の比較——〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語——」『日英
語比較講座第4巻 発想と表現』大修館書店.

池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』NHK Books.

池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』筑摩書房.

影山太郎(2004)「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」『日本語の分析と言語類型—柴谷
方良教授還暦記念論文集—』くろしお出版.

菊池康人(2000)「所有の「ある」と「もっている」」『世界の日本語教育』10.

岸本秀樹(2003)「「ある」「いる」の交替現象」『言語』vol132 大修館書店.

金水敏(2003)「所有表現の歴史的変化」『言語』vol132 大修館書店.

佐治圭三(1992)『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房.

澤田浩子(2003)「所有物の属性認識」『言語』vol132 大修館書店.

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.

新居田純野(1999)「人の所有を表す表現について—「人がある/いる」と「人をもつ」の
両形式の分析から—」『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』くろ
しお出版.

原沢伊都夫(1991)「所有の意味を有する「持つ」の一考察」『日本語教育』74号.

原沢伊都夫(2003)「所有の意味を有する存在文について:意志性の有無の視点から」『静
岡大学留学生センター紀要2.

船田逸夫(1970)「「——がある」と「——をもつ」「所有」の表現について」『言語生活』
225 筑摩書房.

森田良行(1977)『基礎日本語』角川書店.

由井紀久子(2000)「日本語における所有表現の意味」『日本語 意味と文法の風景—国広
哲弥教授古稀記念論文集—』ひつじ書房.

吉川千鶴子(1995)『日英比較動詞の文法 発想の違いから見た日本語と英語の構造』くろ
しお出版.

資料

青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>

CD-ROM 版『新潮文庫の100冊』新潮社

国立国語研究所編『分類語彙表-増補改訂版-』大日本図書

『大辞林第二版』三省堂

アンケート調査用紙